

2020年度  
一般入学試験問題

< 第1回 >

国 語

注 意

- 1 開始の合図があるまで、問題に触れてはいけません。
- 2 問題は18ページ、解答用紙は1枚です。
- 3 鉛筆、消しゴム以外は使ってはいけません。
- 4 印刷がはっきりしないなど、質問がある場合は黙って手を挙げなさい。
- 5 終了の合図があったらすぐに鉛筆を置き、監督の指示に従いなさい。

明 法 高 等 学 校



【一】次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

だいたい批評の文章は、読むのが難しい。

実物、実体を見ていないことが多い。

いくら聞いてねいに内容紹介が行われても、短いスペースの中で、よくわかったと感じることは困難であろう。ときには闇夜にコウモリが飛ぶようなことになりかねない。音はすれども姿は見えず、はなはだじれたい思いをさせられる。

批評は対象を紹介するのが目的ではない。本来ならば、読者の方で対象についての知識をもっていないなくてはならないところである。それが保証されていないから、仕方なしに、紹介を兼ねる。対象について評価、批判を下すのが批評だ。対象がはっきりしていないのに、それについての意見がのべられれば、不案内な人間にはさっぱりわからなくなる。

闇夜のコウモリですら、とらえどころがないが、さらに、そのコウモリの飛び方がいいとか悪いかという議論がなされていても、局外者にはどうすることもできない。

見ていない映画の紹介は、未知を読む力をもっていないものにとっては歯が立たないのである。そういうものについての議論である批評は、<sup>①</sup>二重の未知の要素を含んでいることになる。いつそう理解は困難である。批評を読むというのは、高度の読み方の作業を前提とする。多くの人はそういうわずらわしさに耐えられないから、とかく敬遠される。

批評が栄えるには、批評をする側にも、それを読む側にも、理解が一定の高さに達する訓練が求められる。まず、

ことばを通じて経験しない世界をわかる想像力をきたえ、養う必要がある。もしそれが崩れれば、批評はスィジヤ<sup>A</sup>クしないわけには行かない。

テレビが普及して、一般にことばの想像力が働かなくなってきたのではあるまいか。映像は多くのことを、いかにもわかったように思わせる。擬似現実化である。

ある人はテレビ・ドラマの中の電話の音をきいて、うちの電話が鳴っているのかと思つて立ち上がったという。テレビと現実はそのくらい近くなっている。

結婚ヒロウエン<sup>B</sup>に招かれたある人は、エレベーターの中で、有名なテレビタレントといつしよになった。その人はその俳優の主演する連続テレビドラマのファンだった。顔を合わせたとたんに、

「こんにちは」

という声が口から飛び出したそうだ。いかにテレビが生活の中へ組み込まれてしまつていくかということである。

こういう人が多くなつてくると、フィクションがフィクションではすまなくなり、本当にあつたことと錯覚される。似たような事件や現実と結びつけられて、メイワク<sup>C</sup>したり、腹を立てたりする人があらわれる。そういう誤解を<sup>あらかじ</sup>予め封ずるためである。現に、わざわざ、ドラマに出てくる事件や人物はすべてフィクションであると、断<sup>こと</sup>わるテレビ・ドラマもあるくらいである。

そういうテレビが生活を支配するようになって、われわれは、何でも形を目で見ないと承知しないようになった。

見えないものは難しく、つまらないと思う。

雑誌なども、写真ばかりのページがふえた。かつては文章の理解を助けるためにイラストレーション、挿絵というのをつけたが、いまでは主客転倒、写真が主体である。その説明にわずかにことばが用いられる。『挿語』などといった言い方はもちろんないが、ことばは、具体的、あまりにも、具体的になってしまった。

②このことが読みの危機を招く。未知のこと、【※】なことは、はじめからわからないときめつける人が多くなりつつある。『Ⅰ』≧それでいちばん大きな打撃を受けるのが、二重の未知を背負っている批評のような表現である。

いまだに、とにかく、批評というものが残っているのがむしろ不思議なくらいである。高等教育がこれほど普及したというのに総合雑誌は三十年前よりもかえって不振だと言われる。文学雑誌はどこも赤字覚悟で刊行しているという話だ。

テレビを見すぎる人間は、<sup>\*</sup>形而上けいじしやう的なことばに興味を示さなくなるのである。かつては少数ながら存在した哲学青年というのは、いまやことばすら聞くことがなくなった。『Ⅱ』≧これでは文学雑誌が苦しいのは当然である。

その根本に、ことばの理解の欠如bが横たわっているように思われる。

批評がおもしろいという人がふえないと、教育は人間らしい人間を育てているとは言えないだろう。(A)

職業的技術があつても、文化に対する広い関心をもち、新しい世界への好奇心をいだくのでなければ、教養のある

人間とは言えない。

イギリスのある編集者が、おもしろい雑誌の条件として、人物、土地、書物についてのすぐれた文章をケイサイ<sup>D</sup>することだとのべていたのを読んだことがある。この「についての文章」というのが、広義の批評に当たる。こういうことの言える社会は、言論が成熟しているのである。

われわれ日本人はよくものを読むと言われるけれども、その読んでいるのは、既知<sup>C</sup>を読むに類するものが大部分であつて、批評、評論の文章を読む人はごく限られている。≪ III ≫ その何よりの証拠が、新聞の社説が読まれない事実である。

それでも、人間には、批評本能ともいふべきものがあるらしい。≪ IV ≫ 眞の批評を理解するだけの素養はないという読者も、その批評本能を満たしたいとは考える。そのための文章が人物評である。

会つたことのない人間でも、たえず、名前を読んだり、聞いたりしていると、( B ) 旧知のようになること、さきのテレビタレントのごとくである。たとえば、パブリシティ<sup>\*</sup>の高い芸能人は一般読者に知り合いのような気持をいだかせる。

③ そういう人物についての批評は、新刊の書評などに比べると、はるかに、わかりやすい。未知なことが重なつているという思いはしない。本当はわかつていないことを、いかにもわかつたように思い込む。その人物についての意見であるのに、あたかも、その人物を描写したもの、さらには、その人物そのものであるかのように錯覚する。

こういうわけで、ゴシップ<sup>\*</sup>と人物評とは紙一重の違いとなる。大人の喜んで読むものの ( C ) 多くが、この

種の擬似批評の性格をもっている。本当に、未知を読みとる力はないが、いくらかしゃれた二次的表現を  
読んでみたいという人たちがふえると、擬似批評がふえる。

こういう読みものしか、おもしろくないと言う人は、文字は読めるけれども、読めないと同じである。そういつ  
た意見が欧米であらわれた。

発達したマスコミをもつ社会では、批評、評論がこのような擬似形態へ変形するのはほとんど避けられないもの  
のようである。

映画評、劇評、音楽評、書評が本当におもしろくなったら、その人の読む力は一人前になったと考えてよいであ  
ろう。

〔『読み』の整理学〕外山滋比古

\* 形而上：形がなく通常の事物や現象のような感覚的経験を超えたもの。

パブリシティの高い：世間でよく知られている。

ゴシップ：世間に伝えられる興味本位のうわさ話。

問一 〓 線 A↘D のカタカナを漢字に直せ。

問二 〓 線 a↘c の漢字の読みをひらがなで書け。

問三 (A)↘(C) に入る最適な語を次の中から選び、それぞれ記号で答えよ。

ア あたかも      イ かえって      ウ いかにか      エ きわめて

問四 【※】に入る、「具体的」の対義語を漢字で答えよ。

問五 次の一文は本文から省かれているが、この文が入る最適な場所をⅠ ≍ ≍ ≍ Ⅳ ≍ の中から選び、記号で答えよ。

文学青年ということばは、まだあるにはあるけれども、文学青年を自称する若ものはいない。

問六 線①とは、ここではどういうことか説明せよ。

問七 線②の指す内容として最適なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア テレビが普及して生活を支配し、多くの人が文章に触れなくなってしまっていること。

イ 文章を理解できる人が減り、雑誌なども写真やイラストレーションばかりになっていること。

ウ ことばが主体であったのに、写真などの説明補助として具体的に使われるようになっていくこと。

エ 映像の発達により、フィクションとノンフィクションとの境界が曖昧になってしまっていること。

問八 線③とあるが、その理由を説明せよ。

問九 本文の内容と合う最適なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 批評が栄えるためには、人々の理解が一定の高さに達していて、文化に対しても広い関心をもち、新しい世界への好奇心をいなくすることが大切である。

イ 批評が読まれなくなったのは、テレビの普及によりことばの想像力が働かなくなったからであり、テレビ

を見なければ批評の文章は読めるようになる。

ウ 人間には根本的に批評本能というものがあるので、真の批評を理解するためには、芸能人など一般読者がよく知っている人物の批評を読むことから始めるとよい。

エ 発達したマスコミのおかげで、映画評、劇評、音楽評、書評などが、誰もがわかりやすい擬似形態として映像で理解できるようになる。

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(設問の都合上、一部を改変している。)

認知症かもしれない。

そう思った志乃<sup>しの</sup>さんは、定期検診に連れ出す素振りではあちちゃんを誘い出し、諏訪<sup>すずま</sup>にある大きな病院で検診を受けるよう段取った。

結果は、やはり、認知症だった。

特に記憶障害が顕著<sup>a</sup>で、それも対人に限って記憶が失われている。ただし、見当識障害や判断力の低下などは見られず、いままで通りひとり暮らしをしていても問題はないだろう、ということだった。

介護を受ける必要もなく、いままで通りに暮らしていける。

そう、何も変わりがなかった。「人」に関する記憶をなくしてしまったこと以外は。

昨夜、突然やってきた「孫」を名乗る若者に甘酒をふるまおうと、ばあちゃんが台所に行っているあいだ、志乃

さんが教えてくれたのは、信じられない事実だった。

人生は、「人に関する記憶以外は、ばあちゃんは何も変わっていない」という事実を、どう受け止めていいのかわからなかった。

蓼科のばあちゃんの家は、少年の頃に過ごした思い出がいっぱいに詰まっている場所だった。

囲炉裏のある板の間も、日当りのいい寝室も、黒光りしている廊下も、温かな湯気が立つ台所も、何ひとつ変わっていない。

障子を通して差しこむ朝日のやわらかなまぶしさ、足の裏に感じるひんやりした畳や床の感触、立ちこめる味噌汁の匂い。

そのすべてが、人生の中の少年の記憶を蘇らせる。おかえり、よく戻ってきたね、とムカえ入れて<sup>A</sup>くれている。それなのに……どうして。

ばあちゃんに会うことだけを頼りにここまでやってきて、ようやく会えたのに。

「あの、おれ、なんか手伝おうか」

炊事場に立つばあちゃんに向かって、人生は、柄にもなく言ってみた。ばあちゃんは、にっこりという笑顔になった。

「ありがとう。でも、私、お客さまにお出しする朝食を作っているところなのよ。あなたもお客さまなんだから、お手伝いなんてしていただいたら申しわけないわ。あつちでお待ち下さいな」

人生に背中を向けると、再び、トントントン、とリズムカルに包丁を動かし始めた。

人生は、なんとも言えぬさびしい気持ちになった。<sup>①</sup>敗北感にも似たような思いに押されて、台所を出た。廊下をみしみしいわせて、囲炉裏のある板の間に行く。木戸を開けると、囲炉裏の前に、赤い丹前を着たおかつ頭の少女がちよこんと座っているのをみつけた。

昨夜の、あの子だった。志乃さんと人生が、ばあちゃんの家に着して、最初に玄関に現れた少女。志乃さんに「座敷童<sup>わらし</sup>」と言われて、ぶいっつとどこかへ消えてしまったきり、昨夜は現れなかった。

ばあちゃんの認知症の一件があまりにも衝撃的すぎて、そういえば彼女の存在をうっかり忘れていた。

「……おはよっす」

あいさつなしでは決まりが悪いので、人生は、一応そう言ってみた。

少女は、ちらりと人生に目を向けたが、すぐに囲炉裏に視線を落として、手にしていた火箸で灰をいじっている。人生は、仕方なく、彼女の反対側、対角線上の位置にある座布団に腰を下ろした。

人生は、こっそりと少女の様子を盗み見た。

つややかな黒髪のおかつ頭の少女は、昨夜一見したときには、中学生くらいの印象だった。けれどいま、こうして見ると、高校生くらいに見える。

伏せたまぶたのまつげがびっくりするほど長い。ふっくらした頬はうっすらと桃色だ。「見知らぬ男」を拒絶するのように、昨夜会ったときと同様、口を真一文字に結んでいる。

あんたとなんか、ひと言も口をききたくない。そんな強い意志が、<sup>か</sup>噛みしめた唇に表れている。

こうして囲炉裏端ではあちゃんの朝食を待ち構えているところを見ると、ばあちゃんと近い関係なのだろう。おそらく、昨夜はこの家のどこかの部屋に泊まったのだ。もしかして、泊まりこみのヘルパーとか。

いやいや、そんなはずはない。ばあちゃんは対人の記憶障害はあるものの、それ以外はまったく正常で、介護が必要なわけじゃないってことだったし。

第一、ヘルパーにしては若すぎる。せいぜい十七、八歳というところだろう。

いや、もしかすると十五歳くらいかな。中学生の農村留学とか。だとしたら、冬休みでもないのに、なんでいま頃ばあちゃんの家に寝泊まりしているんだろう。

「……あなた、誰？」

あれこれ考えを巡らせていると、突然、少女が顔を上げて言った。人生は（A）して、胸から心臓が転がり落ちそうになった。

「あ、い、いや、その……おれは、あの、マーサばあちゃんの……親戚、みたいなもんで」

（B）答えた。なぜだか「孫だ」とは言えなかった。

少女は、じっと人生をみつめた。どこか懐疑的な眼差まなざしだ。人生は、鋭い視線から逃げるようにして、うつむいた。

「嘘うそでしょ。おばあちゃんに親戚がいるなんて、一回も聞いたことないし」

刺々とげとげしい声で、少女が言った。正面切って「ばあちゃんと自分の関係」を否定されて、（C）きた。

「誰なんだよ、そっちこそ。なんでこんな朝っぱらから、ばあちゃんちにいるんだよ」

思わずつつかかると、少女はつんとして返した。

「だって、あたし、おばあちゃんの孫だし」

思いがけない返事に、人生は、目を瞬かせて少女を見た。

「孫って……。じゃあ、おれといとこってこと？」

自分に女の子のいところがあるなどとは、まったくの初耳だった。

ばあちゃんの子供は、息子がひとり。つまり、人生の父、ひとりだけのはずだ。人生にはきょうだいもいなかった。たので、ばあちゃんの孫は自分だけだったのだ。

だから、子供の頃、田舎へ来たときの遊び相手は、ばあちゃん。そして、村に住む子供たちだった。いとこと遊んだ記憶など、これっぽちもない。

人生の質問に、少女は、「はあ？」と素っ頓狂な声を出した。

「何それ、どういう意味？　なんであたしがあんなのいとこなわけ？　あたしにいとこななんていないし。マジやめて、こんな超汚い男、キモイよ」

またもや正面切って「汚い」「キモイ」と言われて、いよいよ人生はぶつんと切れた。

「なんだあ、そっちこそ。勝手にばあちゃんの孫とか言うな。ばあちゃんの孫は、おれのほうだし。この【※】が」

ぐつと前屈まえかがみになると、少女は、灰をつかんで人生に向かってぶちまけた。人生はたちまちむせて、「こんのヤロツ！」こちらも灰をつかんで投げつけた。きゃあつと叫び声上がる。あつというまに灰投げ合戦に

なつてしまった。

「 I 「

もうもうと灰の煙が上がる中、ばあちゃんの声が響いた。

人生と少女は、ゲホン、ゴホンと咳せきをして、ようやく合戦をやめた。

ばあちゃんが急いで障子を開け、<sup>B</sup>エンガワのガラス戸を開ける。ひんやりとした朝の空気がすうつと流れこみ、いさかいを沈下させた。

「 II 「

ばあちゃんは、少女のほうに向かって問いかけた。やはり名前が思い出せないらしい。少女は口を尖とがらせて、「つぼみだよ。中村つぼみ」と名乗った。

中村、と名乗るのを聞いて、人生は、はっとした。

ばあちゃんと同じ苗字みょうじ。そして、自分の以前の苗字——父親の苗字だった。

ばあちゃんは、にっこりと笑いかけて、

「 III 「

「『つぼみ』でいいつて。ちゃんとかけられると、超キモイし」

つぼみは、ちよつとフクCれて見せた。そして、

「この汚くてキモイ男が、あたしのこと、いとことか言うの。こいつ、自分がおばあちゃんの孫だつて言うんだよ。ねえおばあちゃん、そんなわけないよね？」

人生が、すかさず口を挟んだ<sup>b</sup>。

「おい。お前、人のこと汚いとかキモイとか言うんじゃないよ。ほとんど初対面の人間に対して失礼すぎだろ」  
すぐさま、つぼみがやり返す。

「何よ。そっちこそ座敷童呼ばわりしたっしょ。あたしは妖怪じゃないし。そっちのほうに妖怪じみてるくせに」  
「何だと、この……」

「やめッ！」ばあちゃんが割って入った。

「とにかく、あなたがたはこの家の大切なお客さまなんだから、ゆったり構えて、楽に過ごしてくればいいのよ。  
何も、けんかすることないでしょう？」

またお客さま呼ばわりされてしまった。

ゆったり構えろと言われても、民宿に泊まりにきたつもりはない。しかも、こんなおてんばと一緒に宿泊客扱いされるのはごめんだ。

「ばあちゃん、あのさ……」

人生は、複雑な気持ちを隠しきれずに、少し沈んだ声で言った。

「こいつのことはともかく、おれ、ばあちゃんの孫なんすけど」  
すると、つぼみが横から言った。

「違うよ。おばあちゃんの孫は、あたし。こいつじゃなくて、あたしだよ」

うっ、まだ言うか。

人生はつぼみをぐつとにらみつけた。向こうも負けじとにらみ返す。ふたりの様子を眺めて、ばあちゃんはとうとう笑い出した。

「 IV 「

片手で口を軽くおさえてくすくす笑っていたが、やがて話し始めた。

「白状するとね。ずうつと昔におじいさんが亡くなってしまって、それから、息子まで天国に逝ってしまったから、私はずっとひとりぼっちだったの」

人生の胸が、どきんと鳴った。

——息子まで天国に逝ってしまった、って、それっておれの親父のこと？

「でもね、ひとりになっても、米作りや野菜作り、料理や裁縫、あれやこれや、やらなくちゃいけないことがたくさんあって、それでなんとか気を紛らわせてきたのよ。ひとりでも大丈夫、って自分に言い聞かせて」

そこまで話すとふうつと大きなため息をついた。

「でもねえ。不思議なことに、息子が天国に逝っちゃってから、私の周りから、どんどん、友だちや知り合いがいなくなっちゃって。……その代わり、知らない人が、ひっきりなしに訪ねてくるようになったのよ。だから、おや？うちって、民宿だか料理屋だかやってたかしら？ っと思ってるね」

あんまりお客さまが多いものだから、とばあちゃんは話を結んだ。

問一 〓 線 A ㄥ C のカタカナを漢字に直せ。

問二 〓 線 a ㄥ c の漢字の読みをひらがなで書け。

問三 〓 線 ① とはどのような思いか、説明せよ。

問四 〓 線 ② のここでの意味として最適なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 解決しない      イ 気まずい      ウ 面倒である      エ 失礼である

問五 ( A ) ㄥ ( C ) に入る言葉の組み合わせとして最適なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア A どきんと      B きりつと      C かつと

イ A きよとんと      B もじもじと      C ぷつんと

ウ A はつと      B じたばたと      C がくんと

エ A ぎよつと      B あたふたと      C むつと

問六 〔 ※ 〕に入る言葉を本文から抜き出せ。

問七 「 I 」 ㄥ 「 IV 」 に入る最適な会話を次の中から選び、それぞれ記号で答えよ。

ア まあまあ、あなたたちは、ほんとにもう

イ あらまあ、どうしたの、あなたたち。おやめなさいな、けんかはだめつ

ウ そうだった、あなたの名前はつばみちちゃんね。何があったの？

エ 何があったの？ 教えてくれるかしら、ええと……

問八 〓 線 ③ とはどのような気持ちか、最適なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア ようやくばあちゃんに会えたといううれしい気持ちと、認知症になってしまったばあちゃんを孫として面倒をみることへの不安。

イ いつまでたつてもばあちゃんに孫扱いされないことへの悲しさと、つぼみとの口げんかについて無関心なばあちゃんへの疑念。

ウ 宿泊客であるつぼみと孫の自分が同じ扱いをされることへの不満と、自分が本当のことを話しても誰も信じたくないさびしさ。

エ ばあちゃんの本当の孫なのに宿泊客扱いされて悔しい気持ちと、ばあちゃんに孫だと理解してもらおうことができない悲しさ。

問九 本文の内容と合う最適なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 志乃さんからばあちゃんが認知症であることを知らされた人生は、ばあちゃんがやっている民宿の手伝いをしようと覚悟を決めた。

イ ヘルパーであるつぼみもばあちゃんの孫だということを知り、人生は驚きとともにつぼみに対して妙な親近感が湧いてきた。

ウ 人生はつぼみの苗字が父親やばあちゃんと一緒であることを知り、ばあちゃんの孫は自分だけではないのかもしれないと思いがたつた。

エ ばあちゃんから自分の父親が亡くなってしまったことを聞かされた人生は、ばあちゃんがなぜ認知症になったのか理解した。

【三】次の古文を読んで、後の問いに答えよ。

\* 縫殿頭ぬひどののかみのふや信安といふものありけり。世の中に強盗はやりたりけるころ、もし家けさがさるる事もぞあるとて、強盗をすべらかさむ料\*に、日くるれば、家にくだといふ小竹のよをおほくちらしをきて、つとめてはとりひそめけり。ある夜まいりみやづかひける公卿の家ちかく、焼亡\*のありけるに、あはてまどひて出いっとて、そのくだの小竹②にすべりてまろびにけり。腰を打折うちをりて、年よりたるものにて、ゆゆしくわづらひて、日数経てぞからくしてよくなりける。いたく支度④の勝すくれたるも、身に引ひかづくこそをかしけれ。⑤

\* 縫殿頭：裁縫をつかさどった所の長官

料：くゝのため

焼亡：火事

引かづく：被害を受ける

〔古今著聞集〕

問一 線①の解釈として最適なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 強盗が人気を集めたころ

イ 強盗が出始めたころ

ウ 強盗が知られるようになったころ

エ 強盗が横行していたころ

問二 線②の主語として最適なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 信安

イ 強盗

ウ 小竹

エ 公卿

問三 線③を現代仮名遣いに直し、ひらがなで答えよ。

問四 線④とあるが、信安が「支度」をした理由を説明せよ。

問五 ــــــــــــــــ 線⑤に使われている、古文特有の表現技法を答えよ。

問六 本文の内容と合う最適なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 信安は竹で家を囲っていたため、それが原因で公卿の家のちかくが火事になってしまった。
- イ 信安は強盗に備えて家の周りに置いた竹によって、自分が転倒してけがをしてしまった。
- ウ 夜中に公卿の家に出かけた信安は、帰りに出くわした強盗を竹で追い払ってしまった。
- エ 年寄りである信安は、竹につまずいて痛めた腰を治すのに長い時間かかってしまった。